

『バーナード経営学の展開——意味と生命を求めて』

庭本佳和著（文眞堂、2006年2月）

会計大学院教授 庭 本 佳 和

「バーナード」という名前に触れて、一般の人がすぐに思い浮かべるのは、陶芸家のバーナード・リーチであったり、劇作家・小説家のバーナード・ショーであろう。子どもや犬好きな人ならスイス原産の大型犬、セント・バーナードかもしれない。経営学の世界では、もちろん、近代組織論・管理論の創始者、チェスター・I・バーナード(Chester I. Barnard)であるが、一般的な知名度において、先の三者に遠く及ばない。

それでも、C.I.バーナードは経営学の世界では巨人である。1938年に出版された彼の主著『経営者の役割(The Functions of the Executive)』は、現代経営学を大きく基礎づけているからだ。今でも、ほとんどの経営学書は組織概念や管理認識を彼に負っているし、組織的知識創造理論における知識観や組織文化理解もまたそうだ。それどころか、その影響は自己組織理論、さらには最先端の経営戦略論にまで及んでいる。

このように書けば、彼はバリバリの経営学者のように思われるだろうが、それは違う。バーナードはハーバード大学中退後、AT&Tを頂点とするベル・システムに入社し、後にニュージャージー・ベル電話会社の社長を20年間務めた人物で、退職後はロックフェラー財団の理事長をはじめ、多くの公職にも就いたバリバリの実務家(経営者)である。その実務家の書いた一冊の書物がバーナード理論として流布し、経営学の世界を変えた。そのことは、母国アメリカに限らず、わが国でも経営関係の研究者なら誰もが承知している。しかし、不思議なことに実務家にはそれほど知られてはいない。たとえば、わが国の経営者や実務家における知名度は、ピーター・ドラッカーの足元にも及ばない。それは実務家が書いたものになのに、バーナード理論が抽象的で難解だからだろう。

本書は、バーナードおよびバーナード理論そのものを明らかにしようとするオーソドックス

なバーナード理論研究書ではない。自己の問題意識という「ボール」をバーナード理論という「壁」にぶつけて、その跳ね返りを手掛りに考えようとするもので、バーナード理論は思考の道具にすぎない。もちろん、道具として使いこなすには未だ完全に解明されていないバーナード理論を読み解く作業が必要であった。バーナード理論研究に本書がいささかなりとも貢献した部分があるとすれば、そのためである。

たとえば、バーナードの行動知を説明するために経営学の世界にはじめて「暗黙知概念(M. ポラニー)」を導入した論文(1983)も収めている。暗黙知は後に野中郁次郎の組織的知識創造理論(1995)の中核概念として、欧米の経営学界にも浸透していった。「わが国で最初にオートポイエーシス論を組織に適用」(長岡)したもの、その一つかもしれない。また1983年論文は、バーナード=サイモン(1978年ノーベル賞受賞者)理論と一般に理解されていた両者が全く異なること、それが科学観の違いに由来することを初めて指摘した文献でもある。

もうおわかりのように、本書は書き下ろし本ではない。生命の意味を経営の意味として展開する「意味と生命の経営学」の構築という視座から編集した論文集である。この観点から、バーナードの人間論、組織理解、社会観、自由概念、科学観、知識観を検討し、それを踏まえて、組織的意思決定、戦略経営、社会的責任(CSR)などを論じている。いわば、バーナード理論の解明を縦糸(手がかり)として、経営学を自然ないし生命から立論するという横糸を編み込み、地球環境問題をも視野に収めた経営理論の構築をめざしたものである。そのような試みは「バーナード経営学の展開」になるはずだという思いをこめて、書名にした。この縦糸と横糸がうまく編み込まれているという自信はないが、それが本書の大きな特徴だろう。